≪原　著≫

記号の存在について

明治鍼灸大学・人文社会教室
中村　清

要旨：記号論は，一般に伝達の手段としての言語を中心にした記号についての論議を展開しており，哲学の分野では記号を用いた論理学の研究がこれと関連して展開している．この小論文で，著者は，記号の意味作用，特にシンボル機能を，そしてその人間の主体的存在との関係を存在論的観点から探究し，記号の存在に形而上学的意味を語りうるのか，どんな意味でそれができるのかをいくらか検討する．シンボルの存在は，通常の対象的実在性とは違った意味で，事物や現象が人間の創造的活動という次元での存在を分有できるものであることを示している．

An Essay on the Being of Signs and Symbols

Kiyoshi NAKAMURA, Ph. D.
Department of the Humanities and Social Sciences, Meiji College of Oriental Medicine

Summary : The main subject of semiotic study today is linguistic problems of verbal media and images. As for the philosophical field, the nature of signs is studied in logistic, logic with symbols.

In this little article, however, the author wants to discuss the signification of signs, especially symbolism in its specific function, i.e. the proper activity of human being, pertaining to the nature of the entity with subjectivity. In order to understand somehow the ontological meaning of the being of signs and symbols, one should examine them referential to the creative activities of the human being and ask if they have some kind of participation to the new dimension of cultural existence over the raw nature.

Key words : シンボリズム Symbolism, 記号作用 Signification, 存在論 Ontology, 記号論 Semiotics.

今日，記号についての論議が盛んである．記号論（semiotics）という一般的名称が使われているが，その範囲や対象はかなりまちまちである．それだけ記号（sign）と称されているものには多くの種類があり，様々な分野に関連し，それぞれの立場からの記号の理論（Theory of signs）が可能だということであろう．様々な記号そのものが存在すると言うより記号は行動つまり生物的活動性と結びついた「現象」の一部と見做されていることが多く，心理学や行動論の立場から研究されている．また言語は，記号の中の記号として研究論議の的になっている．つまりコミュニケーションの手段としての言語は，「意味」を伝える記号として最も優れたものであり，さらに事物の名称や意味内容に本質的にかかわるものとして，記号の原点と見ることもできる．そこで記号論は，従来の語義・文法・統辞論あるいは記号論理学を超えて，意味論（semantics）と同等のものと見做される場合もある．従って意味論は，記号論と内容的に重なる部分も多い．記号論といい意味論といい，論議の中心は意味作用，つまり記号の機能や形態の問題である．しかし表現され，展開されている世界，認識と行動に結びつく記号体系は，人間存在において，人間性にとってどういう位置を有するのか．こうした広汎な，人間的生命の特徴を形成している現象全体の本質は，人間性にとりどういう意味をもつのか．こうした記号作用を存在（entity, existence）という観点からいくらか考察してみることが本小論の目的である．それは，いわゆる自然界の事象とも，人間の生活活動そのものとも全面的には同一視できない本性を備えているもののようである．以下，先ず記号についての考え方，問題点を整理してから，記号の存在について何が言えるか検討してみよう．

1　記号とシンボル

記号を，自然的なものと人為的なものに区分する考え方が古くからある．この区別は記号となる事物乃至事象とその表示する意味との間が，自然界に存在する本性そのままの因果関係や秩序によって結びついているかどうかによるものであるが，認識方法については，両者の間に差異はない．違いがあるとすれば，人為的記号の場合，そこに事物の新しい秩序が現れているという点だけであって，記号の意味作用という点では区別は明確ではなく，重なり合っている．

人間的主体にとり意味が有るなら，すべて記号と称することにすると，記号の範囲は極めて広くなり，内容も定まらず，複雑で曖昧な内容の議論になり易い．しかし意味を抜きにして記号を語ることはできないから，一応何らかの意味を主体に対して有するものは記号であるという立場に立った上で，記号間の差異の方に注目して区別していくことにする．

意味を帯びている記号の中でもっとも明確で，コミュニケーションに中心的役割を果たしているのは言語記号であるから，それが記号論の主たる対象となるのは当然である．あらゆる記号――ゼスチュアから道具のようなものまで――を言語に還元するという考え方もあるが，すべての記号活動・意味作用という人間の内面にかかわる精神活動を，言語という外面的に形成されたものに基づかせようとするのは，本質的に無理があり，順序が逆だと考えられる．しかし意味論や記号論の大部分を，言語の分析，使用形式，行動との結びつきの研究が占めているのは，言語が人間の精神活動の中で，いかに重要な働きをしているかを示すものであり，記号としての言語が文化現象の中核をなし，さらに文化そのものの特質を形成していることもまた真理である．

とは言え，言語が文化そのものを形成していると主張しようとするなら，内的言語とかロゴスとかいった類比的概念乃至表現を用いなければならなくなる．これは論議をいささか精密さを欠くものにする元である．むしろ言語活動が，認識行動の本質とどのように関っているのかが問題である．ことばが認識を可能にする，といった認識論的心理学的見解は，ここでは取り上げない．

また記号は，行動と結びつけて論じられることが多い．人は記号の指示を認知し，事態を了解し，

行動を起し，あるいは態度を決定する．主体の内面的反応における個体性による違いを無視すれば，記号の惹き起こす結果としての行動において，ある程度統計的な，社会学的な反応の法則，様式のようなことが摘めるのは確かである．行動と結びつく記号の大部分は，生物学的・社会学的レベルでの意味を有するものであって，いわば基礎としての日常的生活の必要に何らかの意味で対応したシグナル的機能が中心のものである．これらは行為の原因となる信号乃至合図としての性格を有するものであって，それ自体しての実在性をすでに有する事物の外面的機能，つまり外部世界とのかかわりに関するものである．即ち生物学的・人間的生活活動に機能的に関係する限りでの事物に付与された意味が問題になるのであって，記号自体の存在が有する価値や意味は問題になっていない．その点では自然的記号であると人為的記号であるとを問わず，偶発的意味に留まるものである．これに対して生活的動機から離れた全く恣意的な記号は相対的に少数であろう．しかしその一方で，認識の目的が中心の記号も存在する．S．ランガーは，この意味でサインとシンボルを区別している．[2]

ランガーによれば，サイン（記号）は事物や事象または状況の存在を示すものである．つまり，それに対応している対象があり，それと結びついて相関関係が成り立っている．そのうちの一方は知覚によって把握でき，また他方については関心が抱かれている際にサインが成立する．そしてそれは，それを認識する主体の行為に結びついている．すなわちサインは行動を呼び起こすという機能を有する（先のシグナルの意味に近い）のに対して，シンボルは，行動を呼び起こすためのものではない．[3]こうした行為との結びつきにより区別する考え方に対して，C．W．モーリスは，サインの定義として，現存しない事物について，それがあたかも現存するかのような作用をして生物の行動を支配するすべてのものを言う，としている．そしてそれをシグナルとシンボルに分け，シンボルが解釈主体（受記号体）による他の記号の代用記号で，その他がシグナルである，としている．[4]モーリスの考え方では，言語が中心であり，言語を介しての事象の意味理解と，行動における記号の作用を論じているが，サインの語義を拡張して体系化を試みた点で革新的とされたのである．しかしシンボルを他の記号または事象の代用物だとしている点で，ランガーと語義の理解が異っている．ランガーは，シンボルは対象または記号の代理ではなく，対象についての表象（conception）を担うものだとする．すなわち，シンボルは事象を意味してはいるが，意味しているのは事物そのものではなく，事物の表象だと言っているのである．サインが行動の基礎であり，行動を起こす手段であるのに対して，シンボルは思考の道具であり，表象を誘発するものである．シンボルの有する内包（connotation）または含蓄が，表象として主観に働きかけ，それについて考えることを可能にする，と説明される．[5]このようにシグナルが行動の引き金になる合図である限りでの記号であるのに対して，シンボルは人間の思考の世界に関係している点で区別することにすると，後者は人間の実存に深くかかわってくることになるであろう．ランガーの言っているのは認識と思考についてであるが，思考は人間性の特性であり，新しい次元の存在の可能性がそこに現われ，創造的行為も生まれてくるのである．

思考の行為の本質がシンボル化であること．シンボル機能を担うものは物質的レベルの実在でありながら，シンボルであるためには，非物質的存在として心的生活に参加すること．シンボルこそ動物性の水準を超えた，人間に特有な知的・心的活動を示す証拠である．単なる感覚的活動性だけでなく，シンボルと意味があってこそ人間の世界が形成される．こうした考え方は，デューイやラッセル，ピァジェやケーラー，カッシーラー，ホワイトヘッドなど，多くの哲学者や心理学者，人類学者にも見られるものである．[6]そしてシンボルの体系が広がっている意味論の領域は，言語の領域よりさらに広範囲であり，記号論理学に留らず，一層広い領域に哲学的研究が行われる可能性があ

る.[7] 言語と意味の領域について，こうした考え方は言語の位置付けの点で哲学的に適当と思われる．ランガーに先行するカッシーラーのシンボル論的人間論の中心思想は，人間性の本質がシンボルを用いることにあること，シンボルの存在は人間性としての新次元の実在性を示すものだということである.[8] この点においてランガーの思想は，カッシーラーを継承している．この人間的実在性に対して，記号であるシンボルの存在が占める位置はいかなるものであるか，が我々の関心である．

II　人間存在と記号の存在

こうした記号論，シンボル論の中の人間性とはいかなるものか．世界の中でいかなる存在性を有するのかも検討を要する事柄であるが，ここでは先ず記号機能の主体として，記号の，そしてシンボルの存在としての性格に関係する限りにおいて考察する．

記号は，前述のように，事物そのものを指すというより，事物が帯びる意味を指示するもののことであって，その表現するものがある内容と結びついて記号として機能するのである．だからある事物が記号であるということは，この機能を有すること，つまり表現と内容との結びつきが起こる場であるということであり，それは事物間の，また事物と主体間の関係に基づき，その上に成り立っている．だから事物そのものとしての存在ではなく，関係としての存在が問題にされることになる.[9]

今世紀に入って，ようやく意味論，象徴論が新しい世紀の学問として科学時代の新しい哲学的問題を提起して盛んな論議を惹き起こし始めた時に現れたオグデンとリチャーズの意味論，「意味の意味」[10] は，言語の心理学的研究として先駆的，劃期的であり，記号やシンボルを言語伝達の問題の中で広く考えたのであるが，その認識論については，伝統の実念論的立場に対しては批判的であり，むしろ唯名論的に，普遍者を実在とは認めず，単なる思考の便宜物であり，実在界を説明するために生み出された概念にすぎないとしている.[11]

すでにアリストテレスは，存在の様態を10個のカテゴリーに分けて論じている.[12] この形而上学の基礎的概念は，やはり多分に言語分析的性格のものであったが，それが以後の思想史において存在論の基本として，さらには実在論，観念論双方の出発点として様々な思想を生み出すことになる．この存在の類比（アナロギア）に基づいたカテゴリー論を，単なる観念論議あるいは言語構成の，概念形成の論理にすぎぬと片付けてしまわずに，何らか実在に対応する区別，認識主体と結びついた存在一般の様態を示しているものと受け取って，存在を考える手がかりとしてみよう．

このカテゴリーの一つに関係（relation）がある．関係は，実体（substance）に対する偶有（accidents）の一つであって，実体存在における偶有的な存在様態の一つとして，外面的相対的存在である.[13] 実体に対しての相対，実体間の偶有でしかない関係は，しかしある点で他のカテゴリー，すなわち性質や量，場所などの限定的カテゴリーと異って，もっと適用範囲を拡張できる面を持っている．アリストテレスのカテゴリーは，いわば実体という主語に対する９個の述語の形式であり，これが実在の形式の最高の区別と見做されたものである．それは元々言語分析，概念分析的性格のものであって，歴史の流れの中でその哲学的存在論的価値は見失われてしまったとしても，この分析的研究は，ある意味で今日の記号論の言語分析につながっていると言ってもよいであろう．単なる部分的述語形式としてではなく，実体論（概念的）とは違った意味で，意味作用の次元で，それをすべての範囲に広げて，あらゆる事物を関係として捕えることにより，人間的実在による世界がそれにふさわしく解明されることが期待できる．この「関係」は，実在の帯びる意味を，実在界の中に位置づける手がかりになりうるからである．事物や主体間の関係が意味を生み出している．これはそれにかかわる事物が，ある新しい事態の中におかれていることを意味するのであって，その事物性を，あるいは客体的即物性を超え出ることになる．記号機能は，関係において発現するので

あり，記号は関係的存在として実在性を有するのである．[14]

Ⅲ　創り出される存在界

記号，シグナル，シンボルは，事物と主体との間の関係によって生じ存在する．これを認識行為について見ると，意味の解釈という限りでは，記号機能をあらわす事物は認識主体の外部に留まっていることになる．つまりその間には外面的，表面的関係しか存在しないわけで，存在的意味関係はない．このことは言語記号についても同様である．言語記号は事物として存在するものではなく，主体の機能の所産であるし，また言語機能がいわゆる言語以外のシンボルによって行われるとしても，それは意味として把握する主体の内面において記号作用，意味作用が起こっているのである．従ってこの場合，事物自体の存在や，言語記号そのものの存在性は問題になっていない．信号や合図としてのシグナルや，モーリスの言う記号の代用たる限りでのシンボル[15]はこのようなものである。

また物体的因果関係による事物の生成は，存在に関わる事物間の本質的関係ではあるが，意味的関係とは違った種類のことであるから，ここではそのものとして直接問題にはしない．

それでは記号としての独自の存在について語ることはできないのであろうか．その問題について，ここで三つの可能性について考察してみよう．それは，記号の創造性，実在の代理としてのシンボル，文化の独立的性格の3点である．

ある存在物が，主体にとって何らかの価値としての意味を有するものと受け取られる場合，その対象は主体にとって，記号的意味の中に存在，実在としての意味をも含んでいる．これはその存在物にとっては，主体との関係によって新たに付け加わった存在性である．存在物が主体と関係を結ぶことで新しい意味を獲得することは，記号論で主体の創造行為と呼ばれている．[16]シンボルは人間が造り出すものであって，シンボル機能は人間に特有な活動性であり，人間の本質を示す働きであると言ってよい．事物を生活の中に取り込む．つまり事物のシンボル化，シンボル的形成といわれる行為は，主体側からの意味付与がなされるのはもちろんであるが，それが何らかの物理的形成につながることも多い．意味に従って，よりよく意味を帯びるものになるように働きかけが行われ，新しい形が産み出され，創造される．いわゆる自然界には存在しなかった存在物が現われる．その直接的，造形的表現が美術作品であり，間接的・言語的には詩や文学，音楽となる．これらの存在物は創造された記号的存在であって，生物学的，生理的必然性から生じたものではなく，基礎としての何らかの生命活動との結びつきはあるにしても，それを支えるためとか，その代用物になるといった目的を有するものではない．いわば自由に形成される人間活動の局面である．にもかかわらず，それらは生命的で人間的な活動の本質的価値としての「意味」を，主体と共に分有している．価値を有する存在物なのである．

また時間的遅延という人間行動の特徴もここに適用できる．人間は現在目の前にある物理的対象に対して反応するだけではない．直接接触している対象存在だけでなく，以前あったもの，別の場所にいまあるもの，これから存在を始めようとしているものに対しても反応しうる．そうした存在を実在的に代理するシンボルがある．これは日常の生活習慣の中にも数多く見られるが，宗教的，儀礼的な活動に関係するところで特に著しい．例えば何らかの宗教的シンボルは，実在物としてあるいは，行為として，精神的実在を代理し，また表現するものとして人の思考や生活様式，行動など生活全般に影響を及ぼしうる．表象と存在の双方の点で意味を有する．すなわち精神的意味を帯びる実在としての物体的事象として主体に受け取られ，扱われている．こうしたシンボルを媒介として，物理的と精神的の二つの次元が重なり合う場が生じ，シンボル的世界の秩序が成立している．こうしたシンボル存在や行為は，そのものとしての実体的内容と共に，主体に対する意味をもって存在しているのである．このシンボリズムは，中

世に盛んであった象徴主義的傾向や神話的思考に通ずる点もないではないが，人間性の本質にかかわる意味作用の現われである．宗教学者のエリアーデは，現代人のもっとも日常的な，平凡な生活の中にも潜んでいる活動性であって，これこそが現代に不足しているもの，現代人の精神的更新の出発点になりうるもの，と主張している．[17] あらゆる神話的要素を排除して，科学的合理的に生存を確保しようとする現代の大方の趨勢に対して，この神話的思考復権の主張がいかなる意味を有するかは未知数であるが，これは本題とは別の問題として，意味的実在としてのシンボルが存在することは事実であり，一般的に言って，それらがもう一つ別の次元の存在性を物理的存在に付け加えていることは明らかである．

そして最後に，これらを綜合的に考え合わせてみた場合，人間の造り出した文化の存在について考えていることになる．文化の成立は，人間の生存の仕方と深く関わり合っている．生活様式の全体的システムとしての文化は，民族間にかなりの個性的変異があるが，それぞれの源にあって人間固有の文化として成立させているのは，内面的生命である．そして文化の形式および内容は，生存の必要性と必然性の範囲に留まるものではなく，それぞれの地域の生存条件による現実的規定を受けながらも，主体的な価値観に支配されて，豊かなシンボル体系として形成されている．相続法や婚姻法のような社会制度は，何らかの実際的理由と必要に基づいて作られた規則と理解されうる点もないではないが，その多様性や任意性を見ると，むしろ共同社会の価値意識や選択が重大な役割を果たしていると思われる．そして一旦これが制度などの形で固定，確立すると，その社会の成員としての個人の生活様式を規定し束縛し，拘束することになる．生活方式や行動の個々については，個人に自由選択の余地はあるとしても，文化全体としては，個人個人を包み込んだ，個人を超える上部組織として，構造的に集団を規制する．そしてある種の超個人的存在性を備えるようになる．動物行動学者のK．ローレンツは，こうした超個人的文化を生み出す人間の精神現象を，一つの社会的働きととらえ，人間社会が概念的思考と言語と共通の伝統によって「獲得した基礎的能力」だとしている．そして完全な一個の人間と称するために必要な精神的活動性は，個人としてでなくこの社会の一員であることによってのみありうるとしている．[18] この見方は，動物および人間の社会内での行動の長年にわたる綿密な観察の結果をふまえたものであって，大いに示唆に富むものである．ヒトの社会が獲得した新しい地平，それで形成される人間社会の文化は，自然誌の中で進化の流れとして理解することができるかもしれないが，これを存在の階層としてとらえることもできるであろう．

精神現象，精神活動が人間の特異性をなしており，それが記号を操作し，シンボルを繰る原動力になっているのは確かである．この特異性は，社会，より正確には人間共同体内での関係において成立するシンボル作用とほぼ同一視できるものであり，後者を能力として表現したものである．文化は個々人の生存を超えて存続するが，人間の集団を離れて存在することもまたできない．人類社会から全く切り離されてしまった「文化の遺産」は無意味なものである．こうした文化の在り方はシンボルの存在の様態に類比的である．集団社会の中で精神の存在は可能であり，精神の創造する関係・意味作用の中でシンボルの存在は可能なのである．[19]

以上3点について，記号の，特にシンボルの有する独自の存在について考察してきた．もとよりこの存在は，人間の実在が，そして人間の集団社が存在しなければ成立することのない，その意味で依存的存在にすぎない．関係としていわば二次的存在である．しかし精神活動という地上の生命が到達した新しい地平に現れた，新次元の創造的活動による存在である．意味が単なる認識行為の対象に留まるものではなく，価値として主体と関係を結び，主体の存在に参加する時，シンボルとしての記号は，存在として語られる資格を獲得するのである．

注

1) 例えば：山口昌男監修．説き語り記号論．日本ブリタニカ株式会社．東京．1981．第2章．
文化現象の全般を言語活動に基づけている．

2) Langer, Susanne K., Philosophy in a New Key, Harvard University Press, Cambridge, 3rd ed., 1979；Ⅲ，61，63．（矢野他訳：シンボルの哲学．岩波書店．1972）
カッシーラーは，シグナルは物理的存在の世界に属し，シンボルは人間的な意味の世界に属する，として区別している．
Cassirer, Ernst, An Essay on Man－An introduction to a philosophy of human culture, Yale University Press, New Haven and London, 1972（1944）；Ⅰ－Ⅲ，32．（宮城訳：人間．岩波書店．東京．1966）
Cf. Ortigues, Edmond, Le discours et le symbole, Aubiers, Paris, 1961；Ⅰ－3．（宇波訳：言語表現と象徴，せりか書房．東京．1972）
Guiraud, Pierre, La sémantique, P. U. F., Paris, 1956．（佐藤訳：意味論－ことばの意味．白水社．東京．1971）

3) Langer, ibid.

4) Morris, Charles W., Signs, Language and Behavior, Prentice-Hall, Inc., New York, 1946；chap.1，8；chap.2，7．（寮訳：記号と言語と行動－意味の新しい科学的展開．三省堂．東京．昭和43年）

5) Langer, op. cit., Ⅲ，63，64.

6) Cf. Langer, op. cit., chap.2.

7) Cf. Langer, op. cit., Ⅳ.

8) Cassirer, op. cit., Ⅱ，24.

9) U. エーコは，記号は物理的に存在する物ではなく，記号機能だけが存在すること，それも固定的でなく，内容面はコードとの相関関係によって流動することを強調している．
Cf. Eco, Umberto, A Theory of Semiotics, Indiana University Press, Bloomington, 1976；2，1．（池上訳：記号論Ⅰ，Ⅱ．岩波書店．東京．1985）

10) Ogden, C. K. and I. A. Richards, The Meaning of Meaning, Routledge and Kugan Paul Ltd., London, 1923.

11) Ogden and Richards, op. cit., chap.5.

12) Aristoteles, TA META TA PHYSIKA Δ（vol.Ⅴ），chap. 15，1020 b25～1021 b10.（出訳：形而上学．岩波書店．東京．昭和41年）

13) Aristoteles, ibid.

14) Cf. Eco. ibid., および4．
これについて，オグデン・リチャーズは，ギリシア的思弁の言語依存に批判的であり，普遍者とか「関係」は便宜的概念に過ぎないとしている．しかしそれは，彼が意味の世界を言語の範囲に限定してしまうからであろう．（Cf. Ogden and Richards, op. cit., chap. 2 and chap. 5）

15) Morris, op. cit., chap. 1，8.

16) Cf. Cassirer, op. cit., chap. 6. Whitehead, Alfred North, Symbolism－Its meaning and effect, 1927；chap. 1．5．（市井訳：理性の機能・象徴作用．松籟社．京都．1981）．上掲　記号論．第2章．

17) Eliade, Mircea, Image et symboles－Essais sur le symbolisme magico-religieux, Gallimard, Paris, 1952；Introd.（前田訳：イメージとシンボル．せりか書房．東京．1972）

18) Lorenz, Konrad, Die Rückseite des Spiegels－Versuch einer Naturgeschichte menschlichen Erkennens, R. Pieper & Co. Verlag, München, 1973；Kap. 8，3．（谷口訳：鏡の背面　－　人間的認識の自然誌的考察．上，下．思索社．東京．昭和49年）．Lorenz, Konrad, Der Abbau des Menschlichen, 1983．（谷口訳：人間性の解体．思索社．東京．1985，62）．

19) メルロー＝ポンティは，最後の頃の講義で，人間存在の身体性自体がシンボル過程であるとして，生命の存在論の展開を構想し，次年度の講義に予定していたようであるが，果たせなかった．彼はなまのままの存在の，可能的なものに一般的実在性を認めていた．
Cf. Merleau＝Ponty, Maurice, Resumés de cours, Collège de France 1958～59, and cf. 1959～60, Editions Gallimard, Paris, 1968.（滝浦，木田訳：言語と自然－コレージュ・ドゥ・フランス講義録．みすず書房．東京．1979）．